

at 約束の土地

かみえちご山里ファン倶楽部地域資源産業アドバイザー
関原剛

2017年の訪米視察により共通課題として見えてきた内容について書こうと思う。

私は東京で「商業施設のデザイナー」を十数年続けたのだが、平成の不況にはまり込んだ1995年の1月、再び故郷の「田舎」へ帰った。そして数日後、阪神淡路大震災が発生した。故郷に帰ってから、私は共同体再生の仕事をやるようになった。とにかくそれが「必要だ」と思ったのだ。2001年に、私は日本の田舎で共同体再生のNPOを作った。以降15年近く活動している。共同体再生活動の一部はある種の「手本」として日本政府にも認知された。不思議な縁で「アメリカ」に行くことになったのは、今年のジャパソサエティーと日本NPOセンター共催の地域再生の相互交流ミッションである。私が米国へ初めていったのは30年以上も前だ。今回の訪米にあたり予備知識として『ヒルビリー・エレジー』を読んだ。

30年前のアメリカは日本からはバラ色に見えていたが、それでも私には「陰りの始まり」の匂いがしたものだ。それは外交とか経済とかの問題ではなく、もっと内的な社会構造疲労が、音もなく進行しているというふうな予感だった。こと言われたそれは外交とか経済とかの問題ではなく、もっと内的な社会構造疲労が、音もなく進行しているというふうな予感だった。このような社会構造疲労は現在日本でも加速している。それはひとつふたつの問題を指摘して、それを正せばなんとかなるというような単純なものではない。巨大で複雑にからみあった「地盤沈下」が都市でも田舎でも起きている。おそらく今回の日米相互訪問から見える共通課題とは、まさにこのような「社会構造疲労」に起因するものだろうし、単に田舎が再生されればよいという程度の話では無い。

問題は「過剰肥大の都市」と「過剰縮小の田舎」の双方にあり、我々はそのどちらでもない「適正規模の新たな共同体」の「規模」と「質」をまず定義しなければならない。

実際我々が昨年アメリカで見たのは、問題の表面ですらなかつたらう。本質の問題はより深い。沿岸都市部と内陸部の落差は日本にもある。新たな階層社会の出現、地方や農山漁村の消滅、貧困の「遺伝」という問題。現代では、かつての「オリエンタリズム(サイード)」の構造と眼差しが「同じ国の都市と農山村の間」に発生している。そこにはあきらかな階層意識が存在するし、それは「民主主義的な皮を被ったカースト制度」とでも呼ぶような奇妙な構造である。そのような構造の中、高い塔の上に住む「リバタリアニズム」を標榜する人々が下を見下ろしている。

さてしかし、そのような種々の問題解決のためには、地方の再生活動は不可欠だが、なんでもやみくもにやればよいというものでもないだろう。まず先に、そもそも再生されるべき共同体とは何か、つまりは「どのような規模と質の共同体」が再生されるべきなのか、という間に答えなくてはならない。それはネブラスカ大学のランディ・カントレル教授が主張していたものだし、私もそれを模索している。

—そもそも、どのような規模と質の共同体が人間にとって最も幸福なのか—
—広すぎて白々しくなく、小さすぎて窮屈でない規模とは何か—

このような目指すべき共同体の規模・質・機能・構造を、まず解明しなくてはならない。そのような「北極星」がないと、せっかくの「地域再生活動」がコンパスの無い航海になり「漂流」になってしまう。このような「あるべき共同体の基本定義」は日米が協力して研究できる「先進国病についての治癒指針」の重要な「ひとつ」になるだろう。

過剰肥大の都市では、あまりの人間の多さに「他者」が背景化する。それら背景化した他者はもはや人ではなく「モノ」だ。だから関係性の遮断が起こり、都市は巨大でありながら、各個の関係性は極めて小規模で個々は「部族程度」の関係性の広がりしか持ちえない。このような意味で、大都市は「新たな野生」へと変化しつつあると言える（猛獣が潜むジャングル化が加速するという意味での野生だ）。そのような新たな野生状態での孤立と閉鎖性の中から、やがて宗教ともイデオロギーとも無縁の「個人的憎悪によるテロ」が発生するようになる。

反対に過剰縮小する田舎では、その小ささゆえに小さな権力の固定化が起こり「小さな独裁」が支配する。この窮屈さや牢獄性・パノプティコン性（フォーコー）の強化などにうんざりした若者は都市へ移住し、都市の過剰肥大はさらに加速する。そして「小さな独裁」の歪みの中から、やはり「個人的憎悪によるテロ」が多発するようになる。

だからこそ、過剰肥大でも過剰縮小でもない「ちょうどいいコミュニティ」が求められている。それはこれからより切実になるだろう。たとえば地方の町や村が消滅し、たとえわずかに残っていても「小さな独裁」が支配する歪みの中にあるなら、過剰肥大が加速する都市から脱出したいと「気づいた家族」が望んだとしても、「しかし行くところがない」というのが現実になる。それはもはや近未来には「都市からの逃げ場が無くなる」ということだ。そのようななった「国民国家」は、国家内部での階層分裂が進行し、国家内で「複数種類の国民」の塊へと分かれていこう。分かれた国民同士は「同じ言語を話しながら意思の疎通が出来ない」という奇妙な「バベルの塔化」に陥るだろう。そして老衰のように活動性を低下させてゆく「国民国家」は緩やかに瓦解してゆく。これは割に恐ろしい予測だが、可能性がないわけではない。

だからこそ、そうならないための「ちょうどよい共同体」の研究を、日米協力で推進できれば他の「疲れた先進国」も連動するかも知れない。そのような「ちょうどよい共同体」が、いわゆる「小さな物語(リオタール)」の舞台になる。しかしこれは「小さな話」ではなく実に大きな話だ。

数年前に訪れたチェコで、EUの「マイクロレギオン(マイクロ・リージョン)」の制度を見たが、それは「共同体の規模の科学」の上に成り立ってはおらず、ただ補助金の受け皿としての「任意な広がり」でしかなかった。ネーミングはよかっただけに残念である。つまり現場から考えるような「共同体の適正さ」という分野はいまだ十分に考えられていないし、試みが実行されてもいないということだ。



さて、私は今年のミッションの折、何の土産も買わず、ただひとつ買ったのが「ネブラスカ大学」のシールだった。たしか6ドル50セントぐらいだったのだが、大変気に入って車の給油口の上に貼った。(写真参考)しかしその車はこのごろ調子が悪く、もうすぐ廃車になる運命らしい。ああ、気に入っていたのにシールが無駄になってしまう。さてアメリカの皆さん、写真の海は「日本海」である。したがって海の向うはいま話題の北朝鮮・中国・ロシアである。が、夕日はきれいだ。

ネブラスカと言えば、ネブラスカ大学・RFI代表のチャック・シュローダー氏を書いてくれた私「関原」の絵がある！なんと2枚も！非常に力強く才能に溢れている！チャックありがとう！



さて、ネブラスカ州はなんと日本の半分の面積がある。それが全部平らな農地である。ネブラスカとは、ネイティブアメリカンの言葉で「平らな水」という意味だそう。それは膨大な伏流水の存在を示している。だからネブラスカ州は「ネブラスカ湖」、あるいは「ネブラスカ海」と呼ぶべき場所なのだ。

水は生存の根源である。だからそこは「よい土地」なのだ。「フライオーバーステート」なんかじゃない。他のアメリカの田舎にも、日本の田舎にも、そういう土地はたくさんある。

それはいまの大都市からの目線からは「見えない土地」だ。あるいは、人間が「よい土地」を見つける能力を無くしつつあるのだ。しかしそのような「よい土地」が、本当の意味の「約束の土地」であるに違いないではないか。日米双方の活動者たちは、都市化で見えなくなってしまった「約束の土地」の価値を、再び発見して行く旅の入り口に立っているのだと思う。